

概念 概念に於ける言語の媒介 (完)

—— 論理研究のための一つの試み ——

飯倉 龜太郎

七 意味の構造 三

表象の標示と對象の指示

表象的言語としての翻譯

意味の共同性と概念の媒介

われわれは、上述せる處に於いて、意味の構造が具有すべき共同性を考察して、其れが、單なる人間の並存關係とは、別個の次元を形成する點を、指摘した。言語の形式は、フツセルの場合の如く、單に、意味作用にとつて、外的な物理的條件、若しくは記號と考へられたり、或ひは又、意味作用に参加するとは云へ、實は、表現の意味するもの *das, was er bedeutet oder „besagt“* に對して、單に並存的な、對象への指示 *das, worüber er etwas sagt* のみに終つて、よゝものであらうか。或ひは又、其れが、單なる自他の並存關係を標示し、而して、自己にとつて他者が一個の人格 *eine Person* としてのみ、受け容れられる作用と、考へてよゝであらうか。斯くの如き見地に於いては、自他の關係が、言語を異にする人間相互の場合であつても、或ひは、同一言語に屬する種的、共同的關係の場合であ

つても、均しなみに、我と汝と云ふが如き、並存關係として把握される。

勿論、言語を異にする人間相互の關係に於いても、其れが、單なる物理的關係、ないしは群棲的形態ではなくて、我と汝との、人間的並存關係が成立することは、説く迄もない。而して、斯くの如き關係は、自他を驅つて、原始的な、意志疏通の方法に出しむるであらう。例へば、身振り、對象の直接なる指示、其の他である。此のやうな方法も亦、慥かに、一時的に、或ひは斷續的に、相互の意志を疏通せしめる。一時的、或ひは斷續的であると云ふ意味は、他者の身振りが、我に對して、何らかの表象を興へ得るとしても、しかも、斯かる表象の受容は、其れに對する應答が終るや否や、直ちに消滅して、我と汝とは、再び元の並存關係に立戻る、と云ふことである。言語的媒介の、種的共同性が缺ける場合には、自他の交渉が、必ず一時的、斷續的であつて、恒存する媒介の地盤が失はれると云ふ事態は、否むべくもない。従つて、言語の媒介に依る表象の定位分極は行はれず、表象は、我から他者へ、他者から我へと、無媒介に轉ずる。斯くの如き事態こそ、まさに、表象の標示と呼ぶべきであらう。言語の媒介に於いては、われわれは、何ら表象を標示することなく、單に言葉の言表に依つて意志を通じ合ひ、従つて、表象は、其の在るべき場所、即ち、意識の内部に處を得る。此れが、表象の定位の、本來、意味する處である。註3。

表象が、意識の内に定位せず、外に標示される場合には、上述の如く、自他の關係は、單なる並存に終り、斷續的であつて、自他を恒常的に結合せしめ、相互承認の地盤に安んぜしめる、共同的基底は缺ける。其れに對して、言葉の媒介が行はれて、表象が、意識の内部に定位する場合には、即ち、表象の分極が行はれて、自他の相互承認に基く共同性が、現成する。斯くの如き事態が、表象の定位分極の意味する處に他ならず、同時に又、言語表現の共同性

の眞の構造に他ならぬ。

註(1) フツセル、「論理研究」第二卷、一、四六頁。

註(2) 個々人の並存關係と、歴史的社會關係との比較に就いては、單に、言語の側からのみ、考察されることに依つて、盡くされるものではない。經濟學の、所謂ロビンソン物語が含む如き問題に關しては、唯だ、此の研究の域外に屬することを、附記するに止める。但し、右の二つの關係は、他を一に、類型的に代位せしめ得ざるもの、質的に相異するものであつて、其の様相は、直ぐ後の、翻譯の考察に於いて、明かにせられるであらう。

註(3) 藝術表現の様式の内、表象の「表現」が多く存在することは、周知の如くである。其の事に依つても、われわれは、言語表現の特殊性を知ることが出来る。但し、此の場合、われわれの考察は主として論理に關するものであつて、言語藝術に現はれる象徴形式の如き、表象に關係あるものに就いては、又、美學的な、他の考察が必要であらう。

右に説く如く、人間の種的共同性に相應するものが、表象の定位、並びに分極であるのに對して、單なる、我と汝との並存關係に相應するものは、恒存的な言語的媒介の缺如せる、單なる、表象の標示に他ならない。換言すれば、言語を異にする人間の相互關係に於いては、たとひ、同一事物に關しての知覺が可能であるとしても、其處に、言語の側からの媒介、即ち、直觀の作用が缺ける爲めに、其の知覺も、表象の定位・分極に到達する能はず、單なる、知覺の多様の水準に止まることと、なるであらう。斯くの如き、言語の恒存的媒介に代置するものとして、普通、翻譯が擧げられてゐる。翻譯は、一方には、其れが言語活動の一種であると云ふことから、恒存的媒介者と考へられ、しかも他方に於いて、其れが二つの言語を聯關せしめると云ふ點から、あたかも、人間の普遍的領域を切り拓き得るものの如く解せられるのが常である。併し乍ら、翻譯の果し得る文化の聯關性をば、單純に普遍性と解し、同時に其

處から、翻譯のもつ文化的聯關性に依つて、言語の特殊性が打ち超えられ得るものと考へることは、正確な認識でない。フムボルトが、右の兩側面をば共に強調せんとして、言語活動の退くべからざる聯關性と、しかも、其れにも拘らず、牢固たる特殊性の存在することを指摘して、斯かる兩者の統一を成立せしめる言語活動の精神力を、神祕的聯關 *mystischer Zusammenhang* と呼んだのも、故なきことでは無い。個々の言語に關する實證的研究と、言語の獨特な陰翳を把へる詩人的理解とは、フムボルトをして、一言語内部の汲み盡し難い性格を、見失はざらしめる鍵ともなつた。従つてフムボルトに於いては、二つの言語を結ぶ働きとしての翻譯は、要する處、翻譯者自身の屬する言語の、表現能力と意味性とを、擴大せしめるものに他ならぬ。各々の言語の特殊性は、飽く迄も認められ、従つて「一言語に於ける如何なる言葉も、他の言語に於いて、同一なるものを見出すことは出來ぬ。」^{註1}われわれが、翻譯に依つて見出すものは、反つて、言語間の必然的相異 *notwendige Verschiedenheiten* であり「翻譯の嚴密を望めば望む程、反つて、翻譯の不可能を感じる」^{註2}ことも、なるであらう。

勿論「既に高度の文化を有する時代に於いては、國民の教養に對して、強力且つ有益な影響な興へ得るものは、言語の功績を措いて、他に考へられぬ。」^{註3}換言すれば、文化の交流に於いて、言語の占める位置は頗る重要であり、言語の感能 *der Sinn der Sprache* が擴大されるにつれて、其の國民の感能も亦擴大される。併し乍ら、斯かる文化の聯關性も、特殊なる言語の内に於いて、始めて實現の場所を得るのであり、従つて、一言語の特殊性と云ふ制約こそ、實は又、其の内部に、無限の能力を潜めるものに他ならぬ。「初めは、生活上の日常的使用により、やがては其れを使用する國民の精神に依つて、無限の深みに向けて、愈々高く、益々多様に、昂揚せしめられて、凡てが充分に

果されるとは、誠に、言語の不可思議な特質である。」^{註4}とは、フムボルト自身の述べる處である。上述の如く、フムボルトに於いては、言語の聯關性と特殊性とが、感能に依つて結合せしめられ、同時に、斯くの如き感能の、一言語内に於ける働きは、精神に依る神祕的聯關とさへ呼ばれてゐる。即ち、フムボルトは、言語の聯關性が、實は、一言語内部の媒介作用を將來し、しかも後者は、其れ固有の活動に依つて、眞に普遍性の領域を精神に拓き與へ、斯かる内的深化に依つて、反つて、フムボルトが規定した、言語の聯關性以上の、眞の普遍性の領域が、其處に現成する點を、確認してゐない。斯くの如き、言語活動の媒介性を見失つたフムボルトが、「さまざまな言語を、單に、それだけ多數の同義語「Synonymieun」と考へ、其處から、言語を單なる聯關的並存の姿に於いて把へ、「總ての言語形式は象徴である」として、^{註6}諸言語の類型の水準に止まらんとしたのも、當然のことであらう。

とは云へ、斯くの如き言語の象徴性の内へ、言語の特殊的共同性をも、又其の普遍性をも、均しなみに投じ入れて其れに依つて「言語が、本質的には何ら認むべき變化なしに、しかも、一層高い感能に上昇し、一段と多様な表現に擴大される」と、^{註7}一義的に規定して、よいものであらうか。フムボルトも亦、一言語内部に於ける、表象の分極と其れに依る自他の共同的結合と、言語相互の聯關としての翻譯との、眞の區別に思ひ到つてゐない。既述せる如く、表象の分極とは、對象を言語の世界に媒介するのみならず、同時に、言語を對象に媒介せしめる作用をも含み、斯くの如き、言語の側からの作用は、知覺の單なる多様としての表象をば、定位せしめ、分極せしめるものに、他なくなかつた。斯くの如き、言語と對象との、二重構造的媒介に依つて、言語と活動としての意味が成立し、意味の成立は又、生ける言語として、自他の意識に、表象を分極せしめる。従つて言葉は、其れが生けるもの、換言すれば、意味を成

立せしめるものである限り、必ず、自他の意識に、表象を分極せしめる働きを有ち、而して、斯くの如き表象を支へとして、言葉は、始めて其の位置を得るであらう。斯くの如き觀點からすれば、翻譯の言葉は、其れが分極せる表象を支へとするのではなくて、實は、二つの言語の上に、言葉としての位置を定めるのであるから、勢ひ、其れらの言語をば、表象化せざるを得ないこととなるであらう。

此處に、翻譯の言葉の、注目すべき性格がある。翻譯が、二つの言語を繋ぐものであり乍ら、反つて、必ず特定の言語に於いてのみ現實化する、と云ふ矛盾に従つて、翻譯の言葉は、自らの屬する言語を超えることに依つて、反つて其れを表象化し、自らを言語たらしめることに依つて、反つて、自己を、表象の水準に墮しめる。われわれは、既に、言語を異にする人間の相互を繋ぐものは、原始的な、表象の標示であることを指摘した。表象は、分極に於いて自他の共同性を成立せしめるが、單なる標示に於いては、共同性ではなくて、單なる並存を齎すに過ぎぬ。人間の共同的結合を成立せしめるものは、實に、表象の分極に依る言葉の媒介に他ならず、其れに反して、言語と言語との對立に依る、單なる人間の並存關係は、分極せざる表象の、標示に過ぎぬことを、忘れてはならぬ。簡潔に云へば、言語と言語とを繋ぐものは、實は表象そのものであり、斯かる表象の標示に依つて、僅かに、人間の並存關係が保たれるのである。斯くの如き、根本の事態を認識するならば、二つの言語を繋ぐものとしての翻譯が、單なる、表象的言語に過ぎぬことも、敢へて、怪しむに足りぬであらう。

従つて、われわれは、單にフムボルトの如く、翻譯を以つて、其の言語の感能を昂め、國民の感能を擴大するものと、一義的に解する譯にはゆかぬ。翻譯の言葉は、上述の如く、一方に於いては、表象的言語として、人間の共同性

をば、單なる並存關係に代へんとする、作用を有つ。其れが、一言語の固有なる特殊性をば、單なる並存關係と取り違へると同時に、斯くの如き並存關係を、宛かも、眞の普遍性と取り違へる過誤を將來する。斯くの如くして、言語の種的性格が見失はれ、其れと隨伴して、媒介を失へる、類型的並存としての、言語の象徴性が、眞の普遍に代置する。翻譯の言葉は、特定の言語に於いて、飽く迄も異種として、その言語の共同性に並存して、其れを紊し、其れには同化しない。フムボルトが、翻譯が必ず、それ自身に異種の色彩を有つと論じ、實は、斯くの如き異種なるもの *Transendo* が感ぜられる時こそ、翻譯の最高の目的が達せられたのであつて、其れが感ぜられずに、異種が全く見失はれる *verdrückelt* ならば、翻譯者は原典 *Original* に據らず、過誤をおかすものであると、述べる如く、異種が失はれるならば、其れは反つて、翻譯以下の、單なる恣意に過ぎぬであらう。翻譯の價値は、たとひ、譯語が何れ程流暢であるにせよ、斯かる表現技術に在るのではなくて、フムボルトの如く、原典そのものが、確と感得せられる點に、あると云はねばならぬ。従つて、翻譯の異種性は、その譯出された言語の共同性にとつて、飽く迄も、喪失される筈がな⁸。

言語の共同性と、斯かる翻譯の異種的色彩との並存は、言語の共同性を紊すものとして、反つて、眞の言語活動の普遍性を見失はしめて、諸言語並存の、類型の水準に止まらしめる。眞の普通の領域は、翻譯的な、言語と言語との中間状態、換言すれば、表象の位置に墮した言語にあるのではなくて、既に指摘せる如く、一言語の眞の深みに超え出づる處に現出するのである。媒介の見地に於ける普遍性の性格は、常に、言語表現の有つ種の性格を重要視して其れの媒介に依つて、始めて、事物の主觀化せられた側面が、攝取せられ且つ洗ひ取られて、其處に、言語の特殊性

をば、内に打ち超えつつ、しかも、媒介的に、並存者を統一に高める認識の領域が、現前し來ると考へられる。從つて、認識の領域からの媒介を缺いては、眞の表現は成立せず、同時に又、眞の普遍性は、言語の特殊性をば、無差別又は無記に、一様に象徴の内に投じ入れることに在るのではない。フツセルが、自ら其の立場を持する者ではないにしても、^{註9}後の象徴主義に道を拓くものとして、象徴の概念を擧げる個所を吟味するならば、總じて、言語の表現作用をば、表現すること自體から分離して、^{註10}内外兩作用の並存に墮するか、或ひは又、^{註11}内的活動としての認識作用とは無媒介な、從つて、單に其れと並存する範疇的、形式的統一性としての表現を考へ、^{註12}其處から、眞偽に無記なるものとしての、^{註13}言表の志向をば象徴と規定し、斯くして、表現の特殊的共同の面を、全く無媒介に、象徴形式の内に抛つてゐる點を、思ひ返へすのも、無駄ではあるまい。

註(1)——(8) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften. 8. § 2. Aeschylus Agamemnon, Einleitung, vgl. S. 129 ff.

註(9) Symbolische Logikが Wortではなくて Zeichenを Formelnに譯據することは(例へば R. Carnapp: Abriss der Logistik, Schriften zur wissenschaftlichen Weltanschauung, Band 2. を参照) 周知の如くであり、而してフツセルが、Wortを意味作用に對して單なる Zeichenと考へたこと(例へば「論理研究」第二卷一、三五頁参照)、或ひは、心理主義への峻別から、知覺すること自體と其の表現とを分離したこと等は、シヨルツの言ふ如く、慥かに象徴主義に道を拓くものではあるが(例へば「論理研究」第二卷二、九頁参照) フツセル自身は、一方に於いて、Zeichenを退けたものとしての意味表現に據るものと考へらるべく、其の意味で、自ら象徴主義を探るとは考へ難いであらう。

註(10) 例へば、右に擧げたフツセル「論理研究」第二卷三、九頁、或ひは、前掲書第二卷一、三二頁等。

註(11) フツセル「形式論理學と先驗論理學」二〇頁。

概念に於ける言語の媒介(完)

註(12) 「論理研究」第二卷一、四九頁から五〇頁。

註(13) 前掲書、四四頁。

上述せる如き、言語的表現の共同性に於いては、表象が、意識の内に定位・分極することに依つて、其れを支へとしつつ、意味の統一性が、單一な言葉の形式に於いて、成立するのであつた。即ち、意味の共同性ないしは、意味の統一性は、自他の並存關係が、其處に溶解すると同時に、斯かる自他の並存を溶解せしめ、而して、其れを包攝する意味の共同性は又、必ず、單一なる言葉の形式をば、極限的媒介として、有つ。換言すれば、意味の領域は、其れが既に、主・客の表現的領域、即ち、現象の世界をば、獨立せる統一性として形成することに依つて、反つて、事物と人間そのものとの領域をば、其の極限として、媒介し出すのである。意味の共同性に對して、其の極限的媒介者として立つて言葉の形式とは、他ならぬ、概念であり、而して、斯くの如き概念は、又、既に、表現作用の媒介に依つて洗ひ出された普遍性の領域を、形成するものと云はねばならぬ。意味の統一性が、對象と言語とを、二つの極限として有つ、意識の内外に互る、二重的媒介に依つて、反つて、表裏反轉しつつ、言語表現そのものが、對象として客觀化される事態に關しては、既に論じて來た。言語表現が、右の如き、二重構造を有つことに依つて、反つて、言語表現に依つて成立する意味が、其の統一性を賦與されることも、成るのである。

其れと均しく、概念と事物とを、二つの極限として有つ意味の二重構造的媒介は、又、事物を概念に反轉せしめることに依つて、概念そのものが、實は事物を現はすものとして、斯くの如き、二重構造に依つて、反つて、普遍的領域の統一性を、形成する。意味の二重構造とは、屢説せる如く、言語表現の二つの要素たる、言葉と文法との兩形

式に他ならぬ。意識の二重構造が、表象と直観との、相互媒介に依つて、言葉を媒介し出して、其處に、現象の世界、意味の世界を形成した如く、意味の二重構造は、言葉と文法との、相互媒介に依つて、概念をば媒介し出して、其處に、論理の領域を、形成するのである。われわれは、先きに、意味の世界の成立が、實は、中間者としての言語活動が、反つて、自己を打ち超えつつ、自己の根源たる、人間自身と事物そのものとの領域を、現成せしめることに在る點を指摘した。斯くの如き事態こそ、根源分割の意味する處に、他ならなかつた。而して、他方、同じ意味の世界の成立が、その極限として媒介し出す概念が、實は、右に擧げた根源的・二重構造を有するものとして、其處に、始めて、普遍的領域の統一性が、望みされるのである。

上に述べた如く、意味の共同的統一性は、必ず、概念の媒介を俟つて、可能とせられる。概念の包攝作用と呼ばれるものは、斯くの如く、意味の媒介に依つて、對象の多様が、概念の下に、統一される事態を指す。意識の二重構造に於いて、知覺的表象の多様が、表現の側からする直観の媒介に依つて、表象の定位・分極と云ふ、統一的秩序を興へられる如く、意味の二重構造に於いては、表現的對象の多様が、論理の領域からする概念の媒介に依つて、現象の統一的世界を形成する。斯くの如きものが、意味の構造としての、種的共同性に他ならず、而して、意味的表現の特性たる、了解と相互承認とが、對象に就いての、單なる同一性的指示、乃至は並行的標示ではなくて、實に、對象の媒介的協有に基づく、共同性にあることも、以上の論述によつて、明かであらうと思ふ。屢説する如く、斯くの如き意味の共同性に於いては、表象が、既に意識の内に處を得て、定位・分極し、而して、斯かる意識内の媒介に依つて其の外に、意味として表現せられた言葉は、又、表裏反轉の作用に依つて、客觀的對象として定立される。而して、

右の如き、媒介作用に依る表裏反轉は、同時に、意味の共同性が、概念からの媒介を豫想することに依つて、始めて可能とせられる。其れに反して、意味的共同の媒介を缺く人間の並存關係に於いては、表象そのものをば、外部に標示する事態を必要とし、而して、其處から、言語を異にする人間の、相互を繋ぐものとして翻譯が、當然、表象的言語の性格を帯びる事情も、將來せられるのである。

翻譯に於いては、前にも述べた如く、並存關係にある人間が、共に同一の對象を、指示することは可能であらう。併し乍ら、斯かる對象に就いての表象は、共同的表現に依つて、媒介されることなく、従つて、言語からの媒介に依る、意味的協有關係は成立せず、而して、其處に表出せられる言葉は、常に、對象をば單に指示するに止まつて、概念に轉化する能はず、單なる言葉の、多樣的並存に過ぎぬであらう。斯くの如く、翻譯に於いては、對象を概念に包攝せしむべき、意味の共同性が缺如するのであるから、翻譯は、對象に轉じて客觀化せられ、獨立の意味の世界を、形成することが不可能である。而して、單に、原典の言葉に従屬して、宛かも、直觀の媒介なき表象が、定位なき多様に止まる如く、概念の媒介なき、多様性の表象的言語の域を、脱し得ぬであらう。翻譯が、原典の單一なる概念に就いても、多様に表現し得る理由は、他ならぬ、其れが、表象的言語として、對象を媒介し協有すること能はず、單に、對象を指示するに止まるからである。翻譯は、概念たり得ぬ。眞の普遍的領域を形成すべく、其の要素としての、概念を定立するためには、反つて、其の媒介的基底たる、眞の言語表現の、共同性にひと先づ立戻つて、其處から出發することが、至當であらうと考へる。

註I

註(1) 表象的言語は、異つた言語を繋ぐものとしての、翻譯のみに限るものではない。例へば、一言語内に於ける、古語と現代語

との間の譯文も亦、此れに屬するであらう。古語はも早自他に表象を分極せしめざる言語として、實は、對象化された言葉である。資料、文獻等の如きこれである。本文に論じた翻譯の場合にも、原典の言葉は、對象化されて居るのであり、其れ故にこそ、譯語が、表象の位置を占めるのである。此の事は、言語の多彩にして、深奥なる性格を物語るものとも云へよう。其れは兎も角も、斯くの如く、對象化せられた言語の精神、換言すれば、古代の精神と他民族の精神とは、翻譯や註釋の如き、解釋の見地に於いては、眞に此處に轉化し現成し來るものではない。其處では、たかだか、擬古典主義、或ひは植民地的文化が行はれるに過ぎぬであらう。媒介の見地は、本文の終りに少しく觸れた如く、反つて、翻譯の惹起する共同性の混亂を自覺して、其處から、眞の歴史性と、其の言語の特殊性に立戻ると云ふ、迂回の道を探るのである。翻譯を主題とせぬ拙論に於いて、表象的言語の惹起す、様々の事態は、此れを除外するのを當然と考へた。

八 意味 の 構造 四

意味の統一性と、概念の包攝作用

單一的判斷と、複合的判斷に就いて

われわれは、意味の種的共同性が、翻譯の場合の如き、單なる言葉の多様に止まるのではなくて、意味の統一性による、對象の、概念への包攝と云ふ構造を有つことを、上述に於いて指摘した。斯くの如き、概念の包攝作用は、既に規定せる如く、第一には、知覺と直觀との媒介に依る、意識の二重構造と、斯かる媒介によつて産出されたる、表象の定位・分極とを、基底に有つ。と同時に、第二には、右の如き表象の定位・分極を支へとする言葉と、文法形式との相互媒介に依つて形成される、意味の二重構造をば、其の基底とする。従つて、概念の包攝作用は、意識と意味との二重構造的媒介に依つて、形成せられる。意識の媒介面に於ける表象が、表現的言葉を媒介として、始めて、定

位する如く、表現の媒介面に於ける意味は、又、概念を媒介として、始めて、意味の統一性を可能とする。言葉の媒介なき表象が、單なる、知覺の多様に止まる如く、概念の媒介なき意味は又、單なる、言語の多様性に止まるのである。従つて、概念は、既に表現の域をば、媒介的に打ち超えたものとして、其の言語的形態は、表現的なる言葉ではなくて、實に、事物そのものを現はす言葉の形式に、他ならぬ。

上述の如き、意味の共同性を媒介とする、概念の包攝作用が、既に、一方に於ては、知覺と直觀とを、又他方に於ては、表現の言語的領域を、基底として有することに就いては、稍、異つた形に於いてではあるが、ロツツエも指摘してゐる。概念の包攝作用は、ロツツエに依れば、論理的行爲 *logische Handlung* 或ひは、思惟の行爲 *Handlung des Denkens* であつて、たとひ、其れが一樣に、多様の綜合であるとは云へ、單なる意識の受容と、其れの秩序づけとに關する、覺知の綜合 *die Synthesis der Apprehension* 並びに、直觀の綜合 *die Synthesis der Anschauung* とは、^{註1}別個の綜合作用に他ならぬ。ロツツエは、更らに、覺知と直觀との他に、第三の綜合として、比較 *Vergleichung* に依る、構成部分の要約 *Ansatz* を擧げて、此れをも亦、概念の包攝作用から區別する。「比較に依つては、一般的心像を把持する能はず」^{註2}而して、比較作用に於ける如く、類似せる構成部分から、單に、異つた標識を除去 *einfache Hingewerfung der verschiedenen Merkmale* するに止まらず、斯くの如き、「除去された場所に、一般的標識が、補ひ入れられる *eingesetzt werden*」^{註3}換言すれば、「除去せる個々の標識の、一般者に依る置き換へ *Ersatz*」こそ、^{註4}第四の綜合形式としての、概念の包攝作用に他ならぬ。而して、此の置き換へる作用が、失はれる場合には、論理的、一般標識 *logisch gemeinsames Merkmal* も亦、見失はれるのであつて、此の作

用に依つて、概念の包攝作用たる、抽象化の法則 *Regel der Abstraktion* は、^{註5}始めつ、普遍妥當性を與へられる。

註① *Hermann Lotze: Logik, System der Philosophie, I. 2te Auflage, 1928, S. 36, 37.*

註②③④ 前掲書、四〇頁、四一頁。

註⑤ 此の項は、ロツツエの前掲書、*Die Bildung des Begriffs* の章に據るものとあるが、斯くの如き、概念の形成を、抽象作用の考察に於いて論及する見地、並びに、斯かる抽象作用の理論 *Abstraktionstheorie* に於ける諸相に關しては、*ロツツエ*「論理研究」第二卷一、*Die ideale Einheit der Spezies und die neueren Abstraktionstheorien* の章、特に、二六一頁以下を参照のこと。

ロツツエが、抽象作用に依る概念の形成を、*Allgemeines* 或ひは、*Gemeinsames* と云ふ用語に依つて、一般的、包攝作用と規定した如く、*ロツツセル*も亦、意味の理念的統一をば、心理主義とは異つた見地に於ける、抽象作用に依るものと考へて、斯くの如き、抽象に依つて形成せられるものをば、種としての意味 *Die Bedeutung als Spezies*^{註1} 或ひは、*普遍概念 Allgemeinbegriffe* と、^{註2}規定してゐる。此のやうな、一般者は、*ロツツセル*に於いては、個々の對象の標識ではなくて、其れらを基底とした、新らたなる把握の方法 *eine neue Auffassungsweise* に依る、内容であり、或ひは理念、*Idee*、^{註3}であつて、例へば、*對象としての家の此の赤の要素に對して、其れは赤いもの das Rot*、或ひは、赤の理念 *die Idee Rot* と呼ばれてゐる。併し乍ら、*ロツツセル*に於いては、前にも指摘した如く、斯くの如くして、規定された内容も、*對象と*、單なる内外の並存關係を維持するに止まつて、*媒介の有つ、二重の否定の構造*とは、隔ること、遠いと云はねばならぬ。*媒介の有つ、二重の否定とは、第一に、言語表現が、對象として獨立の領域を形成する際に、單なる外部を否定することであつて、主觀に並存する、單なる外部は、否定的に表現に媒介され*

ると同時に、斯かる否定は又、表現のもつ主観性をも否定して、其處に、表現の獨立的な、意味の世界を成立せしめるに到る。併し乍ら、右の如き、第一の否定に依つて成立した、意味の世界は、更らに、概念の媒介に依つて、表現の領域をば、媒介的に否定して、眞の事物そのものへの、道を拓く。意識が、言語と對象とを、其の極限として有つ二重構造であるのに對して、意味が、事物と概念とを、其の極限として有つ、二重構造であると云ふのは、此の意味である。

従つて、媒介の見地に於ける、意味の二重構造とは、第一に。表象を基底とする言葉をば、意味の共同性に包攝する側面であつて、言葉は、斯かる包攝作用に依つて、單なる言葉から、對象的な觀念として、定立される。前に引用したリットの言葉の如く、表現に依る意味の形成は、客觀化した觀念の *ideal* 領域を成立せしめるのである。併し乍ら、知覺が、單なる受容としては、表象の多様に過ぎぬ如く、觀念も亦、單に言語的表現の側からの、包攝のみに終つては、表現の多様に止まらざるを、得ないであらう。知覺作用が、直觀といふ、言語表現の側からの媒介に俟つて、始めて、表象の定位・分極を可能とし、而して、其れを支へとして定立される言葉が、對象の客觀性に轉化し得る如く、意味の包攝作用は、普通の領域からする、判斷の媒介に俟つて、始めて、表現の多様を打ち超えて、觀念の定位に到達する。而して、表現の多様から、觀念の定位への轉化に依つて、斯かる轉化を媒介した概念は、始めて事物そのものの領域に、反轉するのである。斯くの如き、概念の側からの、判斷作用と云ふ媒介こそ、他ならぬ、言葉の包攝と云ふ、第一の側面に對して、意味の構造の第二の側面を形づくるものと、云へるであらう。

例へば、同一の對象に就いて、われわれは、多様な知覺を有つことが出来る。或ひは、金色として、或ひは、重

さとして、或ひは光として、或ひは冷たい特有の觸覺として、多様に知覺する。併し乍ら、此れ等の個々の知覺が、常に、統一的對象を豫想する如く、斯かる對象を表現するものとしての、金といふ言葉は、われわれに、個々の知覺を統一せる、定位的表象を與へ、此の表象は又、個々の知覺をば、其の基底として有つであらう。言葉の表現は、個個の知覺をば、對象そのものに結び付けて、統一性に於ける知覺、即ち、表象として定立するのであつて、意識内の存在は、その極限に、對象と言葉とを有することに依つて、始めて、統一ある存在たり得るのである。其れと均しくわれわれは、同一對象に就いて、多様の表現を有つ。フツセルの例に倣つて言へば、イエナの勝利者と、ウワートルロウの敗者、或ひは、等邊三角形と、等角三角形の如くである。

これらの例は、フツセルに依れば、「表現された意味は、對をなすものとして、明かに多様であるが、しかも、兩者は同一の對象を指す」^{註4}のであると云ふ。併し乍ら、イエナの勝利者と云ふ表現が、表現されてゐるボナパルトと云ふ人間、即ち、對象として豫め受け入れられる時にのみ、其の現はす、眞の意味が確立するのであつて、其れなくしては單に、何者か知らぬが、兎に角く、イエナに於いて戰勝した人間、と云ふ、言語表現の水準を出でぬであらう。同時に、それが、ウワートルロウの敗者と、特定の聯關があると云ふことも、ボナパルトと云ふ對象を除去しては、不分明に終り、兩つの表現は、各々孤立したものに過ぎぬであらう。此の事は、兩つの表現を讀んで、しかも、ボナパルトを知らぬ人に於いては、當然生ずる事態であつて、斯くの如き、表現の多様は、必ず、對象との聯關を俟つて、始めて、眞の意味を確立する。即ち、言語表現が、表裏反轉して、客觀的な意味を成立せしめたのであり、而して、斯かる意味の獨立なる領域は、對象そのものとも、言語表現そのものとも、別個の次元を成すものである。と同時に、

斯くの如き、觀念の領域は、又、對象と言語表現との、兩側面からの媒介なくしては、決して成立し得ぬであらう。従つて、様々な表現は、對象との關聯に依つて、同一の意味に統一されるのであり、而して、逆に言へば、多様の表現は、意味の同一性に媒介される時には、必ず、對象との關聯を有するのである。

従つて、表現と意味とを、混交するフツサルに於いては、「多様の表現が、同一の意味を有ち乍ら、異つた對象を有つ」^{註5}ことが、容されるかも知れぬが、媒介の見地に於いては、意味の統一性に媒介された、様々な表現は、必ず、同一の對象を有つと、規定される。即ち、意味の統一性に媒介されて、表現の多様が、觀念として定位するのである。前の例に従つて云へば、イエナの勝利者と、ウワートルロウの敗者とは、單に、言語表現としてのみ、受けとられるならば、其の指示する對象は、一方には、イエナに於いて勝利した或る人間、他方には、ウワートルロウに於いて敗れた或る人間、と、各々孤立して、對象の多様に墮するであらう。換言すれば、意味の統一作用の媒介なき、單なる、表現の多様は、必ず、又、對象の多様に墮するのである。而して、表現の多様は、此の場合の例を以つて云へば、意味の統一に依つて、ボナパルトと云ふ、同一の對象を有つと同時に、又、斯かる對象に媒介されて、表現の多様から、必然的に、意味の同一性に轉化する。従つて、フツセルの主張する如く、「多様の表現が、異つた意味を有ち乍ら同一の對象を有つ」^{註6}と云ふことも、不可能となるであらう。

上述の如く、意味の共同的統一は、フツセルの説く如く、對象との並存として、其れと無媒介に成立するのではなくて、斯かる統一の下に、包攝される個々の表現は、實は、包攝作用の媒介に依つて、その言語的形態から、意味的觀念に轉化するのである。従つて、個々の表現は、意味の統一の下に、單に、並存するのではなくて、其れに媒介さ

れ、否定されつつ、新らたなる觀念の領域を、形成するのである。斯くの如き事態は、ロツツエが、觀念の傳統的使用法を考察せる際に、示唆せる如く、觀念の内容が、一方に於いては、a、b、c、d、等の、個々の表現を包攝するに止まらず、同時に、概念が、他の、概念と、區別さるべき聯關が、實は、個々の表現の、包攝作用の内にも含まれてゐる點に、現はれてゐると、云へるであらう。

例へば、今、われわれは、樹木と云ふ概念を例に擧げよう。云ふ迄もなく、樹木と云ふ概念は、例へば、松、柏、榦、杉、檜、等を包攝すると考へられる。其れと同時に、樹木と云ふ概念は、例へば、菊、桔梗、萩、等や、葦、竹、苔、等をば、他の概念に屬するものとして、拒否する作用を有する。従つて、右に擧げた個々の對象は、必ず、樹木と云ふ概念に、包攝されることに依つて、始めて、對象として定立される。斯くの如き、包攝作用を失ふものは、對象として定立されず、單なる言葉として、無意味である。即ち、意味を有する言葉とは、觀念の世界に、對象と化せられた表現である。上述の如く、意味によつて包攝された、個々の對象は、互ひに並存するのではなくて、aとb、bとc、cとdの間に、概念と、概念との相互聯關をも、含むのである。a、b、c、d、は、右の如く、自己の屬する概念と、同時に、其れと他の概念との、二重の、肯定、否定兩側面の、規定を有するのである。従つて、aが否定される場合には、b、c、d、以下、其の概念の包攝する凡てが、否定され得る可能性が、存するのであつて、概念と、其の包攝するa、b、c、d、とは、互ひに、相依り、相俟つて、緊張せる統一を形成すると、考へられるであらう。

従つて、對象に就いての、單なる言語的表現は、其の水準に止まる場合には、それが、對象に「就いての」表現で

あるとは云へ、反つて、對象關係の多様の中に、規定性を失つて了ふであらう。例へば、われわれが、松の木といふ對象に就いて、其れを、樹木として、緑として、或ひは、植物として、針葉樹として、松として、多様に表現するならば、斯くの如き、諸種の表現は、例へば、緑といふ表現からは、春の草であるとか、植物といふ表現からは、苔とか、花とか、果實とか、或ひは、其の他の表現からも、多様の對象が豫想されるべく、松と云ふ對象も亦、それらの多様に並列して、其れらの言語表現が、意味作用の統一なき、孤立せる個々として、單に多様の對象に、多様の表現が並存すると云ふ、事態に止まるであらう。併し乍ら、右の如き、多様の表現をば、樹木と云ふ概念に依つて、包攝するならば、他のさまざまな表現は拒否せられて、松といふ對象が、斯かる概念の下に定位せしめられ、而して、それと同時に、杉、檜、柏、等の對象が、松と共に統一的に、包攝せられるであらう。

上述の如く、多様な對象は、包攝作用に依つて否定せられ、しかも、斯かる否定を媒介として、樹木と云ふ概念が定立せられ、而して、概念の定立は又、否定せる對象の多様のうちから、松といふ個別的對象を、定立せしめる。註8。用語の正確を期して、規定すれば、最初の多様は、對象ではなくて、單なる言語表現に他ならず、而して、概念の包攝に依つて、否定的に媒介された個別こそ、眞に、對象と呼べるべきものであらう。従つて、斯くして定立された個別者、即ち、對象は、多様な對象と、それを否定する概念との、兩側面からする、二重の構造を有つと、考へられる。其れと同時に、概念が、松と云ふ個別者を定立するに當つて、拒否し、否定した他の表現、例へば、緑は、他の概念、例へば色彩の下に包攝せられて、其處に又、新たにたる定位を得ることとなるであらう。斯くの如く、個別者の二重構造は、一方に於いては、概念と對象との、他方に於いては、自己の概念と他の概念との、相互媒介的二重構

造と、規定せられるべきであらう。われわれは、理解を易からしめるために、對象の側面からする、表現の多様の例を挙げた。併し乍ら、單に、概念の側面のみからする場合にも、例へば、樹木と云ふ概念を例として云へば、松とか木工の材料とか、可燃性とか、多様の表現の域に止まつて、斯かる概念も亦、その多様性のうちに墮して、均しなみに、單なる言語表現の並存と化するであらう。上述の如く、言語表現の多様は、概念の媒介を欠く場合にも、又、對象の媒介を欠く場合にも、同様に、惹き起こされる。而して、斯くの如き、表現の多様の水準を脱して、意味の統一性を現成せしめるものは、云ふ迄もなく、概念と對象との、兩側面からする、二重の媒介でなくてはならぬ。

上述の如き、媒介の見地からすれば、例へばフツセルの擧げた例、「ビュセフアラスは馬である。」と、「此の牽馬は馬である。」と云ふ、二つの判断は、決して「二つの表現が同一の意味を有ち、而して、異つた對象を指す。」と云ふことでは無い。ビュセフアラス、及び、此の牽馬、は、未だ單なる表現として、對象との並存關係を有するに過ぎぬ。

従つて、兩者は、互ひに孤立して、表現の多様の水準に止まる。併し乍ら、斯くの如き、表現の多様は、馬と云ふ概念に包攝せられて、各、の孤立性を否定し、而して、意味の統一性に依つて、改めて、個別者としての位置を與へられ、馬と云ふ對象關係に於いて、統一せられる。従つて、二つの表現は、意味の同一性に依つて、異つた *verschiedene* 對象關係を、有するのではなくて、異つた、孤立的表現が、意味の同一性に媒介されて、同一の對象關係を有し、其の下に、規定された位置を得ると、云ふべきであらう。判断作用に依つて、意味の統一性、即ち、概念への包攝作用が、表現の單なる多様をば、客觀的觀念に昂め、其處に、同一の對象關係に秩序づける働きが、形成せられるのであるから、斯かる働きをば、意味賦與 *Sinngebung* の作用と考へるのは、一應、當然のことではあるが、但し

フツセルの如く、作用をば、否定と媒介と轉化とに依つて規定せず、多様な層の並存、或ひは並行として把へる見地に於いては、斯かる意味賦與作用も亦、無媒介に提出されるものとして、われわれの、左袒し難い處である。

以上に於いて、われわれは、概念の包攝作用、意味の二重構造に依る、媒介的統一作用、對象、或ひは觀念の定位に就いて、考察し來つた。フツセルに藉りた、二つの判断の例が示す如く、一般に、概念の包攝に依る、意味の統一作用は、判断の領域に屬するものである。ロツツエヤ、フツセルの如く、意識と表現との、精神に於ける内外の構造をば、媒介的に、確立せぬ場合には、概念化に屬する個別者、a、b、c、d、等は、或ひは表象と考へられ、或ひは對象の標識と考へられ、或ひは表現と考へられて、言語表現と判断との兩つの領域は、常に、混同せしめられてゐる。概念の定位によつて、否定的に、二重構造として定立せしめられた個別者は、既に言語表現として、意識内部の媒介を闊したるものを、更らに否定するものとして、始めて、單なる表現から、客觀的對象に轉化し得るのである。従つて、斯くの如き作用は、概念が對象を秩序づける働きとして、言語表現の次元をば、媒介的に、打ち超えるものと規定し得るであらう。以上の考察から、明かな如く、意味の統一性を媒介とする、概念の包攝作用は、判断の領域に屬するものであり、而して、其の一般的形態は、表現の概念への包攝と、其れを媒介とする、表現の、觀念、或ひは對象への轉化と、規定せられるであらう。

斯くの如き判断作用こそ、他ならぬ、カントの分析的判断 *analytisches Urteil* の、意味するものであらう。主語となる表現が、既に、述語に包攝せらるべき、可能を含むのが、斯かる判断の有つ、一般的性格と云はるべく、此の包攝の成立と拒否とが、肯定と否定との、二つの判断形式に依つて、提示せられるのである。主語としての表現は

謂ば、「概念のうち(ひそかに)ふくまれてゐるもの」と、云はるべく、従つて、判断作用は、單に、概念の内部に於いてのみ、分析的に行はれると、云ひ得るであらう。而して、斯かる分析的判断は、一方に於いては、表現を述語に包攝する側面と、同時に、又他方、包攝せる概念から、個別者としての觀念を、抽出す側面をも有すること、上に屢説せる如くである。斯くの如き、二つの側面は、既に、概念自身の内に含まれる作用として、分析的と呼ばれるのである。前者の側面のみを終るものは、普通、單一なる判断であつて、例へば、前に擧げた「ビュセフアラスは馬である」の如くである。而して、此の包攝作用が、既に、可能として、後の側面を包含することも、前に指摘せる如くである。判断が、單一な形態に止まることなく、複合的に現はれる場合には、一概念に包攝されたる個別者をば、後の側面によつて引き出し、而して、其れを、他の概念の下に、異なる意味の統一性を、媒介としつつ、包攝するのが、一般の形式である。斯くの如き、判断の複合形態として、われわれは、三段論法を擧げることが、出来るであらう。

三段論法は、周知の如く、論理學の傳統的分類に従へば、判断を超えて、推理の部門に置かれるのが、常である。併し乍ら、正確に規定すれば、其れは複合的判断に過ぎぬものと、考へられるであらう。前に規定せる如く、概念に包攝される個別者は、概念に包攝せられることに依つて、同時に、概念を豫想し、而して、其れに包攝せらるべき個別者と、相互に媒介し合ふものであつた。即ち、概念に屬する a、b、b、c、d、等は、斯かる個別者として、定立されることに依つて、反つて、概念を豫想し、其れに屬する a、β、γ、δ、等をば、否定的に媒介する。a、b、の間を結ぶ關係は、常に、概念の他に、概念との否定關係を豫想すること、既述の如くである。

a、b、等が、二重の構造を有するとは、此の意味である。従つて、概念に屬する個別者は、其處に於ける、意味の統一性を除去するならば、新たに、表現の域に轉じて、他の意味的統一作用の媒介を俟つて、他の概念に、改めて包攝し直されうる、可能を有つ。

例へば、樹木と云ふ概念は、前にも述べた如く、松、杉、柏、其の他を包攝すると同時に、菊、桔梗、竹、等を拒否するのであるが、此れらの個別者を、概念・樹木の包攝から離つて、意味の統一性を除去するならば、右の如き、包攝の肯定と、拒否の否定作用とは、消滅せざるを得ぬであらう。と同時に、此れらの個別者をば、改めて、概念・植物の下に包攝するならば、概念・樹木の場合の、個別者の秩序づけ、即ち、意味の統一作用は變化して、松、柏、杉、菊、桔梗、竹、等が、凡て、包攝されるであらう。複合的判斷の一般的形式は、上の如く、特定の概念に屬する個別者を、他の概念と、或ひは、Q等に、包攝し直す手続きに、他ならぬ。従つて、其處に於いては、表現の、述語への包攝と云ふ、單一的判斷が、繰り返へして行はれ、其れに依つて、最後に、特定の概念へ、特定の個別者を包攝すること、成るであらう。

例へば、三段論法の一般的例題として、凡ての人間は死す。ソクラテスは人間である。故に、ソクラテスは死す。

と云ふ場合、大前提に於いては、人間と云ふ表現をば、死といふ述語に包攝し、而して、概念・死に、個別者・人間を包攝せしめる。^{註14}續いて、小前提に於いて、概念・人間に、個別者・ソクラテスを包攝し、斯くして、分析的に、概念・死に、個別者・ソクラテスを包攝するのである。以上の如く、三段論法も亦、述語づける作用の複合として、理解され得るであらう。斯くの如き、述語づける作用こそ、一般に、判斷作用を代表するものと、考へらるべく、フツ

セルの言葉を以つて云へば「一般に、此の側面からして、判断をば、述語づける作用 präzifizierender Akt としつゝ、理解し得るであらう。」^{註15}而して、フッセルが、上の側面に附け加へて、定立する作用 *selbständiger Akt* としつゝの、判断を考慮に入れるのであるが、われわれの規定の如く、概念の個別者・a、b、c、d、を、否定的媒介に依る、二重構造の、定位作用と考へるならば、斯かる兩作用は、共に、述語づける作用の内に、包含せられ得ると、云へぬであらうか。

註(1) フッセル「論理研究」第二卷一、一〇七頁。尙、フッセルは此の個所に於いて、意味の統一性を形づくる抽象作用によつて一方には此處に擧げた *spezifische Einheit* を、又一方には對象の個別と一般との對立化を擧げてゐる。勿論、フッセルに於ては、前者が、意味一般 *Bedeutung überhaupt* に關するもの、即ち *die Domäne der reinen Logik* である。

註(2) 前掲書、二二三頁から二三四頁。

註(3) 前掲書、一〇九頁。

註(4) (5) (6) (9) (10) 前掲書、四七頁、尙、註(9)は、アレキサンダー大帝の乗馬の名。下程勇吉氏「フッセル」の致へによる。

註(7) ロツツエ、前掲書、四二頁から四三頁。尙、此處に表現と書かれた個所にあたるロツツエの用語は *Einzelvorstellungen* oder *Merkmale (notae)* である。註11に觸れる如く、ロツツエに於いても、意味と表現と對象と表象との、混同が見られる一々の例と云ふよう。

註(8) 斯かる否定的、媒介的定立に關しては、山邊元先生「哲學通論」第一章、第三節を参照。

註(11) ロツツエの例は、註7を見よ。フッセルの例としては、例へば、前掲書、一〇三頁、二二二頁等其他。

註(12) (13) Kant: *Kritik der reinen Vernunft*, B. 10. 11. 尙、註12に就いて、カントは、述語が概念に含まれると敘述してゐる。判断に於ける、主語、述語、概念の規定に關しては、後の研究にゆづりたい。

註(14)

此處に例となつた「凡ての人間」といふ大前提の主語は、傳統的論理學に於いて、全稱判斷を形成するものであるが、斯くの如き判斷の分類法に對して、われわれの規定は、左袒してゐない。主語の量的區分に依る、判斷の分類に對する批判としては、例へば、Theodor Lipps: Grundzüge der Logik, 1893. 二七四頁を參照。フツセルも亦、右の如き區分に關しては、無關心の如くである。前掲書、二三三頁參照。

註(15)

フツセル「論理研究」第二卷、二、一〇頁。

註(16)

カントの synthetisches Urtheil に就いては、後の研究に、推理の領域に屬するものとして、考察したいと考へる。尙、概念と、概念とと、及び其れらに屬する個別者との、相互に緊張し合ふ媒介關係から、所謂、概念の内包と外延に就いての、媒介的關係が豫想せられる點を、附け加へて置きたい。尙、フツセルの思想に關しては、下程勇吉氏「フツセル」(西哲叢書)のみならず、直接にも、下程氏から種々御教示を得た。最初の草稿に於いては、「フツセルの意味概念に就いて」といふ、一章が、此の研究の中に在つたのであるが、不満足な個處があつたので、除くこととした。下程氏の、嚴密な御教示に對して、淺學の故に、其れに適しい結果をあげ得なかつた點を、恥ぢ、同時に、心から感謝の意を表したいと思ふ。